皆の中で少しでも安定した生活が送れる子

上　田　起久子

はじめに

てんかんと自閉的傾向を併せ持つH児は、拘りが強く、自分の思いのままに行動しようとしてなかなか集団の中に入ることが難しい。嫌なことがあると「おしっこ」と言ったり、始める前から「終り」と警戒したり大変敏感である。このようなH児に、一日も早く学校生活に慣れ、先生やクラスの友達を受け入れ、一緒に遊んだり、学習したりする楽しさを味わわせたいと考え、明るく、素直な本児の姿の出現を目指して取り組んだ。障害による自制の効きにくいことや体調そのものに大きな課題を持つ点で、医療と家庭との連携による発作対策は指導上、切っても切り離せない。

1　対象児のプロフィール

(1)　生育歴

○昭和59年１月22日生　６歳10ヶ月　男子　第１子（２人の妹）　吸引分娩　お乳をよく吐いた。
３歳ごろ自閉的傾向（国療鳥取病院）・４歳ごろ感覚統合不全（国療西鳥取病院）と診断。

○市立W保育所４年、市立Ｓ保育所１年を経て本校小学部に入学。

○てんかん｛63.10診断～周期的に棘波（脳波異常）が見られる。｝、自閉的傾向

(2)　諸検査による実態

①　遠城寺式乳幼児発達検査

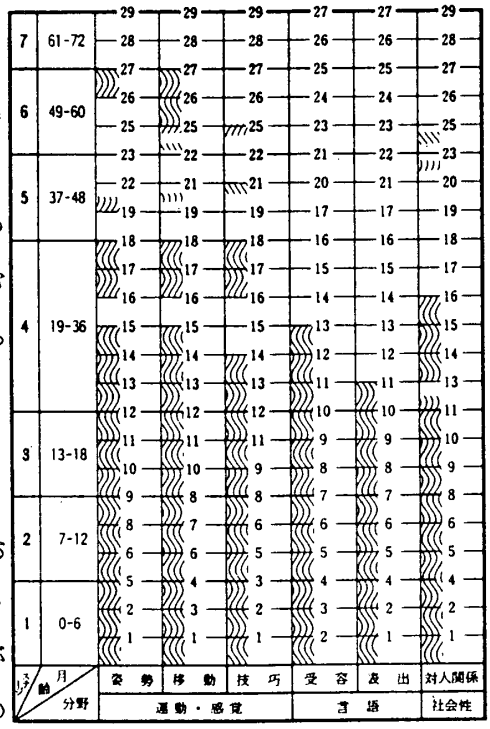
移動運動	手の運動	基本的生活習慣	対人関係	発　語	言語理解
３：４	２：６	３：０	２：０	２：０	１：９

運動や身辺自立に比べ、社会的分野に遅れがあり、発達の偏りが見られる。言語面に関しては、２歳くらいの発達を示し、<物の認知ができにくい><おうむ返しがほとんどである>ため発語として表れてこない。しかし、生活場面では状況を敏感に感じ取っていて、内言語は豊かであると思われる。

②　ＭＥＰＡ

第３ステージ（１歳６カ月）通過。第４ステージにおいてバラつきが出てくるが、ＭＥＰＡのクロスインデックスをとると、実際は、第５ステージになってから差が見られ出す（表２）。内容的には、「早く走っておいで」の

図７　ＭＥＰＡプロフィール表１



〈到達率〉　クロスインデックス表2

項　　目	第4ステージ	第5ステージ
運動・感覚領域	93.5％	71.7％
言語・社会性領域	93.7％	62.5％
調　整　力	93.4％	74.1％
筋力・持久力	92.5％	74.2％

指示に従う・順番を待つ・ルールのある遊びなどでつまづきがあり、いずれも理解言語を必要とする項目ができないことが分かる。(到達率も6～7割と低い)また、運動・感覚・領域や言語・社会性領域の身体意識に関する項目が低くなっていることから生活経験の不足が伺える。

③　行動特性

- その場の気分や調子に左右されやすく、じっとしておれない。
  (・学習中に席を離れ、水道の水を流して遊ぶ・スプリンクラーを見に外に出ることが多く、その前で盛んにジャンプする・金魚や鶏、兎など小動物が好きで、長時間でも眺めている)
- 感覚遊びが多く、拘りがあり、中止されると怒って大泣きをする。
  (・本のページめくり・うちわや棒状の物を目の前で振る・クレパスを箱にあて音や感覚を楽しむ・体の揺さぶりや回転を喜ぶ・汽車や飛行機の音に敏感～聴覚優先型である。)
- 合同学習や朝の会で話を聞く活動を苦手とし、注意散漫となりやすい。

[掻き回す音をきくH児]

- 規制されたり、強制されると物を投げる・唾を吐く・叩く・かむなどの攻撃的行動に出る。
- 体調や気分の良い時は大変人懐こく、抱き付いてきたり、甘えたりする。

2　指導の方針や手立て

(1)　医療や家庭との連携をとり、体調に留意する。

医師の方針に従い、投薬をきちんと守ることに心掛ける。生活ノートや登下校時を利用し、その日の家庭および学校生活の様子を話し合い、医師に正しい情報を提供する。

(2)　生活のパターン化を図り、流れに沿った行動がとれる。

生活リズムを確立し、活動を繰り返すことによって学校生活に慣れることができる。更に、見通しを持つこともでき、落ち着いた行動や集中して取り組む力が育つ。

(3)　集団生活の中で仲間意識を育てると共に楽しい生活を提供する。

本児の好きな活動を多く取り入れ、心の安定を図ったり、友達と遊んだり、一緒に行動することによって楽しい学校生活が送れるものと思われる。

3　指導の実際

(1)　キュア＆ケアによる発作対策

毎月、保健室が出す「発作のようす」カードに家庭および学校での発作の様子を記入し、主治医に提出する。（発作の程度を大・中・小とし、○△×の記号で示す。）

小発作（目をつむり、じっとする）がほぼ毎日あり、一日でも頻繁に起こっている。生活ノート

を中心にH児の２学期までの家庭での発作の様子とその時の学校の調子を簡単に記録してみた。

月	家　　庭	学　校	月	家　　庭	学　校
4 5 6 7	・声を上げ、その後目つむり ・ほとんど毎日声を上げる発作 ・朝から小発作が目立つ ・宿泊中（ＰＭ９）に声を上げて朝10秒おきにカクンとなる発作	・ぐずりが多い ・イライラ ・眠気 ・ゴロゴロ ・朝不調	9 10	・朝10秒おきにカクンとなる発作 朝大声を上げる発作 小発作（５～10秒の割で20分位続く） 給食中に声を上げる発作 ・夜声を上げる発作 朝10秒おきにカクンとなる発作 大声を上げる発作	・元気がない ・ボー ・給食中眠る ・落ち着きがない ・比較的落ち着いている
8	・声を上げる発作、小発作頻繁	・失禁が多い			

表に示すような学校での様子を家庭に連絡し、定期的に、また必要に応じて医師に報告してもらっている。例えば、９月の　給食中、すぐ横になり眠ってしまうこと　などは、投薬の種類や量の決め手となり、日々変化している子どもの状態に対応したものとなった。

(2)　生活リズムの確立

一日も早く学校生活に慣れることを主目標にして本児とのラポート形成の手掛かりの中心を**日常生活指導**においた。着替え・排泄・食事・遊び・学習など毎日、繰り返し行う活動を一日の流れの中でパターン化することにより本児にも見通しが立ち、安定した状態で学校生活が送れる。以下は、H児の変容の様子の一部である。

	４月の実態	手　立　て	10月現在
着替え	・ちょっとの隙をみて、着替えの最中に室外に飛び出す。 ・「脱いでたたむ」の一連の活動の途中で本やおもちゃに行き、指示が通らない。 ・甘えて自分からはしようとしないことが多い。	・１対１で目を離さないようにするが、無理強いはしない。 ・他に気を取られないように、着替えが済んでからとの声掛けをする。 ・ボタンを摘ませ、着替えの時間であることを意識づける。	・教室からほとんど飛び出すことがなく、落ち着いている。 ・時々、手に何かを持っているが、着替えに支障をきたさず、続けて活動できる。 ・声掛けに応じて自分でも取り組み出している。
朝の会	・担任２人がかりで連れて来る。 ・椅子にじっと座っていないで、室外に出ようとしたり、本を物色したりする。 ・挨拶や手遊び、話を聞く活動は落ち着いてできない。 ・友達を噛んだり、叩いたりする。	・自分の椅子を持たせて一緒に連れて来る。 ・室外に出ることはさせないが、本はある程度容認する。 ・膝にだっこして落ち着くのを待つ。 ・瞬間を捕らえるようにする。	・朝の会の雰囲気が分かり、自分の判断で椅子を持って来る。 ・室外にはほとんど出なくなっているが、何かを手に持っている。 ・一人でも座って話が聞け出した。歌に合わせての模倣が増えた。
学　習	・直ぐ水遊びが始まり、机上学習が成立しない。 ・合同学習は一人活動になりやすく隙を見て金魚や築山、スプリンクラーの所に行く。 ・一つの活動に集中できず、イライラがある。	・最低すべき所にだけは参加させる。 ・ある程度満足させてから、合同学習に参加させたり、皆と同じ場にいたら良しとする。 ・歌や動きのある活動や本児の好きなシールを貼り、ぬり絵をさせる。	

(3) 楽しい活動

生活単元学習 は、行事を中心に組んであり、話を聞いたり、覚えたりする学習ばかりでなく、歌を歌ったり、絵を描いたり、体を動かしたりするようなことは比較的H児も学習に参加しやすいものである。机上学習を苦手とするH児が、この生活単元学習の中で興味を持ち、しかも集中して頑張る姿がたくさん見られた。

《たなばた発表会》
・篠飾りの輪つなぎを糊の感触を楽しみながら作る。・招待状の下絵を意識して塗り込む。
・合同音楽や朝の会での取り組みの集大成として大勢の前で「きらきら星」の楽器演奏をした。

《宿泊学習》
・おふろの学習で皆と一緒に入り「出ない」とぐずった。
・お皿の係となり、嫌がらずに先生と一緒に配った。
・１回目は、興味を示さなかった布団敷きを２回目は、自分で押し入れから引っ張り出してきた。
・友達が塗っているのを見て、やる気を起こし、自分も宿泊の旗を黙々と塗った。

学校行事 は、クラスや学部を越えた独特のムードがある。大集団の中でも自分なりに活動していた。特に、自然の中での活動（いもうえ大会・プール学習など）は、のびのびしており、生き生きとしたH児の地のままの姿が表れていた。

4 考察および今後の課題

私達に一日も早く心開いてくれることを願い、少々のそれや外れは容認した上で、本児ができるだけ喜んで取り組む活動を考慮してきた。このことがH児の精神的な安定を作り、教師との信頼関係を形成する近道になったと思う。そして、それが集団生活をする上で重要な『他を認める』ことを少しでも可能にし、H児の安心感や指示に従って行動しようとする素直さを生み出してきたと思う。段々友達を意識し始め、側に行ったり、何かしている様子を見るだけでなく、この頃は、自分も真似をしようとする素振りが伺われるようになった。皆の中に入ることすら難しかったH児が、皆と同じ活動がしたいとの要求を持ち始めてきている。発作との関係で毎日、毎回という訳にはいかないが、少しでも他を見て『楽しそうだな、自分もしたいな』という気持ちになってくれたことが大きな成長であると思う。

自己コントロールが難しく、友達ともトラブルを起こしており、耐性を身に付けることも一つの課題である。が、このような意欲的な姿が数多く出現するための取り組みこそてんかんという障害を持つH児にとって今一番大切なことではないだろうか。学校を少しでも楽しいものに感じ、安定した状態で学校生活が送れるよう今後も医療との連携を図りながら指導に取り組んでいきたい。